「油注がれた者（キリスト）の秘密」

～油まみれになって祝福に満たされる～

イザヤ書 61 章 1～3 節　讃美歌 265、96

1 主はわたしに油を注ぎ／主なる神の霊がわたしをとらえた。わたしを遣わして／貧しい人に良い知らせを伝えさせるために。打ち砕かれた心を包み／捕らわれ人には自由を／つながれている人には解放を告知させるために。2 主が恵みをお与えになる年／わたしたちの神が報復される日を告知して／嘆いている人々を慰め 3 シオンのゆえに嘆いている人々に／灰に代えて冠をかぶらせ／嘆きに代えて喜びの香油を／暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。彼らは主が輝きを現すために植えられた／正義の樫の木と呼ばれる。

マルコによる福音書 13 章 3～9 節

3 イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家にいて、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。4 そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。5 この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。6 イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。7 貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。8 この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。9 はっきり言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

■　本論

アドヴェント第二の週に入りました。

旧約聖書に記されたイエス様のお姿を見つめていきます。

今日は、イザヤ書 61 章の初めのところをお読みいたしました。

イザヤ書は全 66 章という聖書の中でもひと際に長い書物ですけれども、今日、お読みしたところは、その最終盤ということになります。

ここでイザヤは、イザヤ書全体の中でも特に強く濃く、来るべき救い主と、その救い主がもたらしてくれる救いがどういうものであるのかということを記しています。

まるで、預言者イザヤが、救い主自身と重なるようにしまして、「わたし」という一人称が用いられながら、来るべき救い主のお姿はこういう方だと、神はこういう救い主をお遣わしくださるのだ、ということを言葉にしていきます。

今日は、61 章の最初をお読みいたします。1 節。

主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。

救い主は、主なる神の霊にとらえられる人物です。

聖霊に導かれる人物です。聖霊のみに支えられる人物と言っていい。

その「わたし」に、主は油を注がれた。

ここに、今日、特に注目するべき言葉がでてきました。「油を注ぎ」です。

これが、メシアというヘブライ語です。ギリシア語にすると、キリストです。
この「油を注ぐ」という言葉が、来るべき救い主を指し示す言葉になっていきます。

旧約聖書の中で、油を注がれる人物と言えば、主に三つの役割を担う人たちです。
それが、預言者、祭司、王でした。
その職務に就く人たちに、神様からの祝福があるように、神様からの導きがあるようにと、先輩の預言者から、先輩の祭司から油を注がれるという儀式が行われました。
ですから、その儀式は、一つには神様の祝福を受ける者になるという意味と、もう一つには前の世代から次の世代へと神の民の歴史を引き継ぐ者になるという意味との二重の意味が重ねられることになりました。
その儀式として、新しい世代の預言者に、祭司に、王に、油が注がれました。
そして、新しい預言者、祭司、王は「油注がれた者」、すなわち、メシア・キリストとして、その職務へと踏み出していくことになりました。
が、旧約聖書を読んで気づかされますことは、イスラエルの王たち、祭司たち、預言者たちには、ほとんど碌な人間がいないということです。
誰にも欠点はあります。しかし、そういうレベルのものではなく、悪にひた走る。
貧しい人を虐げるですとか、富を独占するですとか、偶像崇拝に耽るですとか、危機を危機だと認識せずに、平和だ、平和だと嘘の安心に民衆を扇動する。
おおよそ神の僕にふさしくないと思える人たち、信仰の模範にする、というよりは、むしろ反面教師にすべき人たちが、旧約聖書にでてくる多くの「油注がれた者」です。
当然、その人たちに神様は怒りを燃やされます。国は滅びます。
そこで、民は祈るのです。本物の「油注がれた者」よ、来てくださいと。
イザヤが語っていたような本物の「油注がれた者」を、神様、遣わしてくださいと。
その祈りが「油注がれた者・メシア」としての救い主を待望する願いとなりました。
神の民は祈り、待ち続けたのでした。
その使命を明確に自覚している本物のメシアを待ち続けたのでした。

その使命とはどういうものか。何よりも***貧しい人に良い知らせを伝え***ることです。
聖書が言う「貧しい人」というのは、単にお金に困っている人のことを言うのではありませんでした。その「貧しい人」は、「打ち砕かれた心」をもつ人です。何らかの闇に捕らわれている人です。3 節、嘆いている人です。それは、悲しみを知っている人、絶望を知っている人と言い換えることもできるでしょう。
先週に学びましたエレミヤは、真実の言葉を語るがゆえに牢獄にぶちこまれたのでした。正しさのために苦しむ人たちがいる。正しいものは正しいと語るがゆえに、理不尽にさらされる人たちがいる。
ちょっと妥協したり、ちょっとごまかしたり、ちょっと手を抜いたり、それが世の常識だとされる生き方ができない。世の中が合理性や効率性を優先して進んでいくなかで、一つひとつのことに真心を込めて丁寧に取り組む、そのために苦しむ人たちがいる。あるいは、何で自分が苦しんでいるのかも分からない、どうすればいいのか分からない、見上げるのは天しかない、そういう嘆きを持つ人たちもいる。
聖書が言う「貧しい人」とは嘆く人のことです。自分の欠乏を、この世の力で埋め

ようとはしない人のことです。その欠乏を、神の恩寵で埋めようとする人のことです。ですから、聖書にはお金持ちであっても、あるいは王であっても「貧しい人」と呼ばれる人物がでてくる。「貧しい人」とは、神を求める人のことです。
　そういう「貧しい人」に、天の国はあなたたちのものだという良き知らせを、福音を伝えること。それが、「油を注がれた者」の使命です。
　この世では不幸とされる、生きにくさを覚えている「貧しさ」。しかし、それは天の国の中に生きる糧でありまして、その「貧しさ」が神を近くさせるわけでして、ゆえに、「貧しい人は幸いなるかな」と、神はあなたの打ち砕かれた心と共におられると、その福音を伝えることが「油注がれた者」の使命です。

　*捕らわれ人には自由を、つながれている人には解放を告知*する。
　この「解放」というヘブライ語は面白い言葉なんです。
　もともとは「開く」という意味なんです。それは、囚人が牢屋に入れられているところから、外に出される。暗い部屋からまずしい光にさらされる。そこで、目が開かれるというところから出てきた言葉です。ですから、「解放」と訳されるんですけれども、預言書ですと、例えば「目が開く」、「耳が開く」という時によく使われます。

　イエス様が目の見えない人の目を開かれる、耳が開かれない人の耳を開かれるというお話があるじゃないですか。あれは、この救い主のお働きをされているんです。
　そこで、本当に開かれているのは、心なんです。心が罪から解放されている。
　そのことを知りなさいとイエス様は言われるじゃないですか。
　目を覚ましていなさいと。あの言葉は、あなたは神様に解放されているんだということを覚え続けていなさいということですよね。
　この世の何かを見るんじゃない。神に解放されていることを知りなさい。見なさい。
　目を覚ましていなさいと言われる。

　わたしたち誰もが、何かに捕らわれています。
　この時代にあって、この場所、この文化、この世の常識と呼ばれるもの、自分自身の欠点やコンプレックスというものに、必ず何かに捕らわれています。
　そのすべてから自由であることはできません。
　けれども、わたしたちは必要としています。自由になる時を、解放される時を。
　少なくとも、この礼拝の時、神の御前にある時、この瞬間だけは、貧しい人として、ただ神のみを持つ人として、この世の雑事から自由になりたい。
　それが、神の国の中に生きるということです。
　そのために、イエス様が来てくださいました。
　自分も、この世も、わたしがどういう人間であるのか、さまざまに評価します。
　その評価をもって、わたしを捕らえます。一定の価値観にしばりつけます。
　しかも、その評価の基準はさまざまです。
　人によってさまざまです。場所によってさまざまです。
　けれども、そんな評価とはまったく関係ない、そんな評価からまったく解放された場所が人間には必要なんです。それが、人間の本来の在り方ですから。

その場所をつくり出すために、イエス様は来てくださったんですよね。
神の国を、この礼拝を生み出すために、イエス様は来てくださったんですよね。
昨日ことが、明日のことが頭をよぎることはある。疲れ果てて、睡魔に勝てないこともある。それでも、ここにいる。この時間、神の国の中に身を献げているということが大切です。3節をごらんください。
シオンのゆえに嘆いている人々に、灰に代えて冠をかぶらせる。
灰は悲しみのしるしです。旧約の民は、悲しい時に灰をかぶった。
この世に生きていたら悲しいことがたくさんある。辛いことがある。
自分のふがいなさに涙がでてくる。
が、そこで悲しんだがゆえに、神はあなたに冠をかぶせてくださる。
冠は、王がかぶるものです。
すなわち、神は、この世であなたが生きている、がんばって生きている、悲しみも経験して生きている、それだけで十分だと、あなたを王にしてくださるという。
神は、王に向けるべき敬意をもって、あなたに臨んでくださるという。

嘆きに代えて喜びの香油を、暗い心に代えて賛美の衣をまとわせてもくださる。
嘆きを抱えて礼拝に来る。暗い心を抱えて礼拝に来る。
そうであるがゆえに、神は、あなたを「油注がれた者」にする、賛美の祝宴に集う者にする、と言われる。
嘆きは家に置いておいて、というのではない。
晴れやかな心になってから、礼拝に来るというのではない。
嘆きを抱えて礼拝に来る。暗い心を抱えて礼拝に来る。
一週間の間に抱えざるをえなかったものを携えてやって来た者を、神が変えてくださる。神に、神にのみ変えていただこうとする者を、神は愛し、油を注いでくださるんです。すなわち、神に祝福された幸いなる者に、神の民の歴史を引き継ぐ者にしてくださるんです。
その場所を作り出すことこそ、本物の油注がれた者が成し遂げる使命でした。
ここで、この世に捕らわれている者を解放し、その人を油注がれた者にする。
それを成し遂げるのが、本物の油注がれた者です。
旧約の民は、この本物の油注がれた者を待ったのです。
待って、待って、待ち続けたのです。

そして、その日が来たのでした。
今日、お読みしたイザヤ書の個所は、私たちにとって本当に大切な個所です。
聖書のどの個所も大切なんですけれども、この個所は、イエス様が公のご生涯を始められる時に、ナザレの会堂で最初に読まれた御言葉でした。
この個所を読まれて、イエス様は言われました。
「この聖書の言葉は、今日、あなたが耳にしたとき、実現した」（ルカ 4:21）。
わたしたちが耳にするときにも、実現をします。イエス様が私たちのメシアになる。
イエス様は言われたのです。この御言葉に記された本物のメシアがやってきた。それが、わたしだと。

　そのイエス様のご生涯がどこに行きつくものであったのか。
　今日は、もう一つ、そのことを確認して終わりたいと思います。
　先ほど、マルコによる福音書 14 章をお読みしました。
　文字通り、イエス様に油が注がれる場面です。
　福音書が記す唯一の、文字通りイエス様に油が注がれる場面です。
　そこは王宮でもなければ、神殿もありません。
　華々しい儀式も、民衆からの賛美もありません。十字架の時が迫っています。イエス様はエルサレムの権力者たち、祭司長や長老たちに命を狙われています。
　その時、イエス様は、ベタニアという、「悩みの家、貧しい家」という意味を持つ小さな村で、その村にある「重い皮膚病の人シモン」という人物の家で一夜を過ごされていました。
　ちょうど、食事をしていた時に、一人の女性が入ってきました。
　その場にいた者、みんなが驚くのです。何をしに来たのか。
　女性の手には、非常に高価なナルドの香油が入った石膏の壺がありました。
　女性は、その壺を壊して、香油をイエス様の頭に注ぎかけます。
　イエス様は、この女性の手によって、文字通り「油注がれた者」になられた。
　イエス様を、油注がれた者・メシアにしたのは、この女性です。
　当時にあっては、身分が低い、貧しい者とされた女性によって、イエス様は「油注がれた者」になられる。エルサレムの大祭司からではない、この女性からです。

　その意味が分からない、一緒に食事をしていた男たちは怒りだします。
　何をするのかと。どうして、そんな高価な香油を無駄遣いするのかと。
　彼女を厳しくとがめたとあります。
　男たちはその意味が分からなかったからです。
　その女性にもよくは分かっていなかったかもしれない。
　ただ、ただ、イエス様に親愛の思いをあらわしたかっただけかもしれない。
　その行為に意味を与えられるのは、イエス様です。
　イエス様は言われるんです。
　するままにさせておきなさい。……わたしに良いことをしてくれたのだ。

　女性がイエス様に油を注いだことは***良いこと***なのだと、イエス様だけがそこに意味を見出しておられます。もちろん、ここに至るまで、聖霊に導かれるメシアとしての歩みがイエス様にはあった。が、ここで油注がれることは良いことなのだと。
　なぜならば、8 節。***この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。***

　女性がここでイエス様に油を注いだことは、埋葬の準備となった。
　だから、良いことなのだと言われる。
　イエス様は、油を注ぐ、すなわち、メシアとなるということと、御自身が十字架に死ぬ、埋葬されるということとを結び合わされるんです。
　イエス様は、***主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた***というイザ

ヤの御言葉を朗読することで公のご生涯を始められました。
　主なる神は、わたしに油を注ぐ、わたしをメシアにする。
　それがイエス様の自覚であられた。
　そのメシアの歩みはどこを目指すのか、どこで真にメシアとなるのか。
　それは、十字架においてであり、埋葬においてである。
　そのことを女性は図らずもあらわしのだと、イエス様は言われるんです。
　ですから、***はっきり言っておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう***という言葉が生まれてくる。
　それはそうです。イエス様は十字架でこそ、メシアとしての職務を果たされるということを、図らずもながら、女性はあらわしたわけですから。
　女性によって油注がれる、十字架がメシアとなる儀式の場である。
　それが、本物のメシアの姿でした。

　このメシアが、祭司長にも、弟子たちにさえも分からなかった。
　人に解放を与えるのは、強い力をもった救い主であると信じていましたから。
　人を牢獄から解き放ち、まぶしい光を与えるのは、超人的な奇跡を成す人だと思っていましたから。
　この世の預言者も、祭司も、王も、みんながひれ伏すような偉大な救い主を待っていましたから。
　女性に油注がれ、十字架で人間の企みに敗北するようなメシアが現れた時に、誰もそれが本物の救い主であると気づくことはできませんでした。
　ただ、イエス御自身が自覚されていました。
　主はわたしに油を注ぎ、主なる神の霊がわたしをとらえた。

　そして、今、わたしたちは、このイエスをわたしの油注がれ者として礼拝をしています。十字架でメシアとしての生涯を生き切り、ご復活されたイエス様を礼拝しています。成し遂げられたからです。誰も予想していなかった本物のメシアとしての歩みが成し遂げられた。ですから、わたしたちは今、礼拝することができます。
　ここに集う者が、***灰に代えて冠をかぶらせ、嘆きに代えて喜びの香油を、暗い心に代えて賛美の衣をまとわせる***、神に祝福された油注がれた者となる。
　その御言葉は成就しました。すべての雑事を後ろにおいて、わたしたちは今、解放されて、神のみを礼拝するのです。その時が来たのです。
　クリスマスは、その時が来た。そのことをお祝いする時です。
　お祈りをいたしましょう。

■　***祈り***
　わたしたちとあなたがたとをキリストに固く結び付け、わたしたちに油を注いでくださったのは、神です。コリントの信徒への手紙二 1 章 21 節
■　***静止の時***

『子どもと親のカテキズム』

問３１　預言者(よげんしゃ)としてのイエスさまのお働(はたら)きは何(なん)ですか。

答　　イエスさまは、預言者(よげんしゃ)として、聖書(せいしょ)の言葉(ことば)と聖霊(せいれい)によって、神(かみ)さまの御心(みこころ)を教(おし)えてくださいます。今(いま)も、教会(きょうかい)の説教(せっきょう)を通(とお)して、また一人一人(ひとりひとり)に聖書(せいしょ)とお祈(いの)りを通(とお)して語(かた)りかけてくださいます。ですから、私(わたし)たちは心(こころ)をこめてキリストの御言葉(みことば)を聞(き)きます。

「油注がれた者」であるイエスさまの一つ目のお働きは、預言者としてのものです。

預言者というのは、神の御意志、神の御心を預かり、語り伝える人のことです。

旧約聖書において、神様はアブラハムやモーセ、預言者などに御自身の御心を伝えられ、彼らを通して語られました。イエス様はその預言者としてのお働きを完成させられます。

神様の御心は十字架において人間を救うということにあらわされました。

そのイエス様が天に昇られたとき、聖霊がくだり、教会が生まれました。

今、わたしたちはイエス様が完成された御心を、聖書を通して受け取ります。

聖書が説き明かされる説教を通して、受け取ります。

そこで、わたしたちは神に出会うのです。

そのために、聖霊が働いてくださいます。わたしたちが聖書を通して、説教を通して、神の恵みに触れるならば、そこには聖霊の働きがあります。

聖書を読む、説教を聞くという行為は、聖霊なる神が働かれる時ですので、厳かな時間であるべきです。私たちは心をこめてキリストの御言葉を聞きます